

# 「知らせたい」を知ってもらいたい

まちなかを歩くと、私たちの周りには、たくさん看板や標識、数多くのマーク（しるし）があることに気づきます。特に、福祉に関するシンボルマークは数多く、駐車場にある「障がい者のための国際シンボルマーク」や、可愛らしいデザイン「マタニティマーク」などはよく知られています。また、最近では認知症サポーター養成講座を受けた人に配られるオレンジリングや、緑色の「心はればれゲートキーパーリング」といったように、色別リングによるものも増えてきています。

## ■きっかけは「ヘルプマーク」

先日、市内在住のある青年と話をする機会がありました。ペースメーカーを植え込んでいます。言うその青年は、いまSNSなどを活用しながら、「ヘルプマーク」の普及啓発に取り組んでいます。今回、私と意見交換したのもその活動の一環です。

なぜ、「と言う」と伝聞・推量の言い方にしたのかですが、それは快活に話をする彼の姿からは、ペースメーカーの植え込み手術を受けているとは感じられず、本人からの申告がなければ全く気づかないからです。今回のコラムのポイントはここに



ヘルプマーク

普段は「見えないもの」をどのように多くの人に分かってもらえるようにするのか。今回、そのことを強く感じさせてくれたのが、シンボルマークを使つての「見える化」でした。

ペースメーカーは、一定リズムの電気信号を送ることで安定した心臓の働きを確保するための装置です。ですのでIH調理器や各種無線機などによる電磁波にとっても弱く、ペースメーカーを植え込んでいる人にとって、それらはとても危険な代物です。私たちが「知らなかった」だけでは済まされないかもしれません。

一方で、よくダメだしをされる携帯電話は、本体から15cm以上離れていれば支障ないとのこと、むしろ過度の気遣いはいらぬということになります。

このように何が良くて、何がダメなのかを正確に知ることはとても大切です。

先ほどの青年が身に付けているヘルプマークに戻ります。このマークは、人工関節や義足を使用している人、内部障がいや難病の人、精神や知的障がいの人、あるいは妊婦など、外見からは何らかの配慮や援助が必要なことがわからない人たちが、実際は日常的に支援を必要としていることを周囲に知らせるためのものです。ただ、このマークそのものが比較的新しいこともあり、ほとんど知られていないのが現状です。ある人たちの「知らせたい」が、受け取る側の「知りたい」と必ずしも噛み合うわけではないのです。

私がお伝えしたいのは、今回紹介したヘルプマークのみならず、他の身近にあるいろいろなマークやサインにもっと関心を持つてもらいたいということです。そのような小さなことの積み重ねが、地域の「住みよき」をつくりあげていくのだと私は信じています。



かほ市長  
市川雄次